ジェイアーン国際協働学習研究ワークショップ 第一回開催報告

デジタル・シティズンシップ
メディアリテラシーとの関係から学ぶ

防災世界子ども会議プロジェクト創設者　岡本　和子
実践女子大学短期大学部　栗田　智子
法政大学　坂本　旬

GIGA スクールで実現する新たな学びとして「デジタル・シティズンシップ教育」が急速に多くの教育関係者に浸透しつつある。このデジタル時代に求められる新たな教育に関するワークショップを、2020 年 12 月 13 日、ジェイアーン主催、日本教育工学会 SIG-08　第 16 回研究会とユネスコのメディア情報リテラシー教育を推進する AMILEC とが共催する形でオンライン開催した。参加者の事後アンケートより、成果と課題を明らかにし、今後に向けての方向性を紹介する。

COVID-19　デジタル・シティズンシップ　メディアリテラシー　SDGs　国際協働学習

1. はじめに

ジェイアーンは、2003 年設立以来、教育の情報化とその実現に向けて「世界と学ぶ！」をスローガンに、グローバル教育・ICT 教育を推進するネットワークである。世界 140 カ国・地域の学生、教育者が参加する国際 NGO アイアーンの日本センターとして、デジタル・シティズンシップにつながるグローバル・シティズンシップの形成を目標とする NPO 法人である。

COVID-19 パンデミックを契機に「デジタル・シティズンシップ」が注目されるきっかけとなったのは、緊急事態宣言下の 2020 年 4 月 27 日、文部科学省中教審初等中等教育分科会・新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会合同会議で「デジタル・シティズンシップ」、この考え方の重要性が提案されたことにある。

NPO カタリバ代表の今村久美さんが提出された資料には次のように書かれている。

「GIGA スクール構想を実現する上で、デジタル前提社会で生きる子どもたちがそのリスクを理解し、安心安全に利用しながら可能性を広げられるように、『デジタル・シティズンシップ教育』の推進が必要。 現在の『情報モラル教育』は、個々の安全な利用を学ぶものであるのに対し、『デジタル・シティズンシップ教育』は人権と民主主義のための善き社会を創る市民となることを目指すものである。それは、個人のモラル教育ではなく、パブリックなモラル教育とも言える。利用を躊躇させる情緒的抑制から、賢く使う合理的活用ができる人材育成へと、転換をすべきである。」

また文部科学省主権者教育推進会議の最終報告書に、2016 年選挙権年齢が満１８歳に引き下げられ、2022 年度からは成年年齢が１８歳へと引き下げられることに伴い、子どもたちがこれまで以上に主権者として必要な資質・能力を確実に身に付けていくことが必要となっている。インターネット情報などの豊富な資料や多様なメディアを活用して情報を収集・解釈する力や、情報の妥当性や信頼性を踏まえて公正に判断する力などのメディアリテラシーの育成を図ることが重要であるとし、メディアリテラシーへの関心が高まっている。

２．ワークショップ開催の目的

世界的なソーシャル・メディアの普及・進化に伴い「デジタル・シティズンシップ教育」というデジタル時代に求められる新たな教育が欧米で議論され、教育実践が積み重ねられている。日本においても教育政策上の課題として避けられないところまできている。

この流れで、諸外国（とりわけアメリカ）のメディアリテラシー教育がデジタル・シティズンシップの形成に果たす役割や期待される成果、事例や研究について考えていくことを目的とする JEARN 主催の第 1 回研究ワークショップを開催した。

ジェイアーンは、相互につながったデジタル世界において、「世界と学ぶ！」をスローガンに、ICT を活用し、日本の小・中・高・大学生を世界の同世代の生徒とを結びつけ、”地域と世界をつなぐ SDGs”をテーマに、国内にいながら、SDGs に貢献するプロジェクトを通して、オンラインで「国際協働学習」に取り組む、新たな時代の教育手法を推進している。

2020 年１月世界経済フォーラムで、第４次産業革命に対応した未来の教育モデルの一つとしてアイアーンが提示された。アイアーンが「デ

ジタル・シティズンシップ」の理論を土台にした国際協働学習の教育実践を推進しているからである。

３．ワークショップの内容

図１　ジェイアーン研究ワークショップ WEB ページより

●日時：2020 年 12 月 13 日（日）
15:00 ~17:00
●会場：Zoom
●対象者：教育の未来に関心のある方
●参加者数：63 名
●テーマ：デジタル・シティズンシップとは何か:メディアリテラシーとの関係から学ぶ
主催：NPO 法人 ジェイアーン
共催：日本教育工学会 SIG-08、AMILEC
●プログラム：
１．開催趣旨
GIGA スクール構想の実現は 2020 年度内へと前倒しされ、全国の小中学校で児童・生徒 1 人に 1 台、パソコンなどの学習用端末を配備し、リモート学習に切り替えられる環境が実現することになった。2020 年は学校教育の転換期となり、子どもたちの学びのスタイルが大きく変わる。これから何ができるようになるのか。GIGA スクールで実現する新たな学びとして、「デジタル・シティズンシップ教育」を多くの教育関係者に勧めたい。
「デジタル・シティズンシップ教育」は、「コンピュータ 1 人 1 台時代の善き使い手をめざす学び」を目標とする。ネットの危険性を叩き込むのではなく、ICT 活用とメディア・リテラシー教育の導入を前提とし、「世界標準」の参加型学習によって対話をしながらデジタル技術・思考を身につけ、社会を主体的につくる学びを目指すものである。
２．講演・質疑応答
・「デジタル・シティズンシップの基本と実践」今度珠美（鳥取県教育委員会）
第一講演者の今度珠美先生から、「デジタル・シティズンシップ」の考え方を最初に広めたのは、アメリカの国際教育テクノロジー学会 International Society for Technology Education（ISTE）であり、デジタル・シティズンシップについて構成要素を示し、次のように定義している。「生徒は相互につながったデジタル世界における生活、学習、仕事の権利と責任、機会を理解し、安全で合法的倫理的な方法で行動し、模範となる」ことだという。そのうえで具体的な授業案を考える参考として、「Common Sense Education」がハーバード教育大学院プロジェクト・ゼロの協力を得て開発したカリキュラムを取り上げている。幼稚園から高校３年生までを対象に、デジタルライフで直面する課題と関心に焦点を当て、デジタルジレンマの視点から作成されており、デジタル社会のシティズンシップに必要な資質をサポートするように設計された例が紹介された。

・「メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係」坂本旬（法政大学）
第二講演者の坂本旬先生からは、デジタル・シティズンシップの概念が ICT 教育や教育工学における ICT 利用の適切かつ責任ある行為規範から生まれたものである一方、メディアリテラシー教育ではその概念のなかにシティズンシップが内包されていたことが説明された。近年の教育のデジタル化により、両者の結合が求められるようになったということである。特にアメリカの文脈では、2016 年のアメリカ大統領選における「フェイクニュース」の影響や、2017 年 4 月にワシントン州で成立したデジタル・シティズンシップ法の成立により、両者の結合に注目が集まった。メディアリテラシーは未だに多義的な概念ではあるが、いずれにせよシティズンシップを抜きにはできないことが強調された。

図２　メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係図

研究会においては Zoom のチャット機能を活用し、講演中にも質問が寄せられた。講演後の全体質疑ではコメンテーターとしてあらたに豊福

晋平先生（国際大学）と芳賀高洋先生（岐阜聖徳学園大学）も加わり、これらの質問にお答えいただき、現代のデジタル・シティズンシップとメディア・リテラシー教育の関係についての理解と議論が深まった。
・司会：栗田智子（実践女子大学・ジェイアーン副理事長）

４．成果と課題

第 1 回研究ワークショップの事後アンケート（n=17 名）の結果をもとに成果と課題について考察したい。

研究ワークショップの内容について、「大変よかった」（16 名）、「よかった」（1 名）という結果であった。理由を見ると、デジタル・シティズンシップ教育の背景から具体的な実践方法まで学ぶことができたという点が高く評価されたことがわかる。例えば、メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係がわかったこと、アメリカの実践教材を見ることができたことなどが挙げられた。参加者にデジタル・シティズンシップ教育の全体像を知ってもらうことができた研究ワークショップであったと思われる。

次に、日本の教育現場にデジタル・シティズンシップ教育を導入することについての質問については、「非常に重要であると思う」(14 名)、「重要であると思う」（3 名）という回答であった。デジタル・シティズンシップ教育が、日本の教育現場に必要であることを参加者と共有できたのではないかと思われる。重要であると思う理由として、「これからのデジタル時代に従来の情報モラル教育からの脱却が必要であること」と、それ以上に多くの参加者が、「日本にシティズンシップ教育が必要であること」を挙げていた。デジタル・シティズンシップ教育が、民主主義と人権を守る健全な社会の実現が目的であり、メディアリテラシーと関係が深いことが認識されたと思われる。

しかし、その一方で、「重要だと思うが、日本の学校現場が、デジタル・シティズンシップ教育を容易に受け入れない」ことを指摘する声もあった。「生徒指導目線ではなく、どう生徒一人一人が自分ごととしてデジタル・シティズンシップを取り入れるかが重要である」というご意見もいただいた。どのように、日本の学校現場で、デジタル・シティズンシップ教育をおこなうのかという実践レベルの課題を今後は解決していく必要がある。

最後に、「グローバルなオンラインコミュニティを持つアイアーンについて、デジタル・シティズンシップ教育の観点からどう思うか」という質問には、「大変意義があると思う」（10 名）、「意義があると思う」(7 名)　だった。理由から、アイアーンには次の３つの意義があると考えられる。まず、「アイアーンは、他国の生徒と協働学習をする場であること」、２つ目が、「アイアーンは、デジタル・シティズンシップ教育についての研究や情報を欧米から得る窓口であること」、３つ目が、「アイアーンは、デジタル・シティズンシップの重要性を訴え行動する組織であること」である。アイアーンの日本センターであるジェイアーンの役割が、さらに明確になったように思われる。しかし、「アイアーンで、どのプロジェクトにどのように参加するかによって、デジタル・シティズンシップ教育の場として生かしきれない可能性」も指摘する声があり、今後は、具体的なプロジェクトとデジタル・シティズンシップ教育との関係を研究し、実践例を積み上げていく必要があると思われる。

以上のように、今回の研究ワークショップは、デジタル・シティズンシップ教育の全体像とその日本の教育現場における重要性を示すことができたと思われる。そしてデジタル・シティズンシップ教育という観点から見た、アイアーンに期待される役割も見えてきた。一方、課題として、実際に学校でどのように子どもたちを善きデジタル市民に導くのか、日本の学校に即した具体的手法や教材の開発、デジタル・シティズンシップ教育の場としてのアイアーンのプロジェクト研究も必要である。

＊事後アンケートの報告は、添付資料１を参考にされたい。

５．今後に向けて

デジタル・シティズンシップは多様な内容を含んでいるが、本ワークショップはその中でもメディアリテラシーとの関係に焦点を合わせた。とりわけ、偽情報や陰謀論が世界的な問題となっている今日、メディアリテラシー教育の必要性はますます高まっている。しかし、日本ではデジタル・シティズンシップもメディアリテラシーも広く知られているとはいえず、教育政策に影響を与えるにはまだ至っていない。アメリカのように、教育運動の必要性が高まっていると言えるだろう。

アイアーンの国際協働学習にとって、デジタル・シティズンシップやメディアリテラシーは基礎となる能力であり、実践の中にどのように位置づけていくのか、理論的にも検討を進めていく必要がある。

参考文献

今度珠美、坂本旬、豊福晋平、芳賀 高洋(2020)「特集：デジタル時代のシティズンシップ教育

アメリカのデジタル・シティズンシップ教育教材の日本における学習実践の可能性」
法政大学図書館司書課程
メディア情報リテラシー研究 第1巻2号

栗田智子（2020）「国際協働学習とiEARN」法政大学図書館司書課程　メディア情報リテラシー研究　第1巻2号

坂本旬 (2020) 「デジタル・シティズンシップとは何か—情報社会に求められる新たな教育—」（GLOCOM研究ワークショップ　2020.6.19）
https://note.com/junsakamoto/n/n7847cbdae8d7

坂本旬（2020）「メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係」（2020.12.13）
https://note.com/junsakamoto/n/n3bb65c8291b6

文部科学省主権者教育推進会議（2021）「今後の主権者教育の推進に向けて（最終報告）」
https://www.mext.go.jp/content/20210331-mxt_kyoiku02-000013640_1.pdf

森本洋介 (2021) 「JSTE SIG-08メディアリテラシー、メディア教育第16回研究会『デジタル・シティズンシップ：メディアリテラシーとの関係から学ぶ』開催報告」　日本教育工学会ニューズレター（No.247）（2021.3.3）
https://www.jset.gr.jp/wp-jset/wpcontent/uploads/2021/02/JSET_NL-247_rev4.pdf

添付資料 1

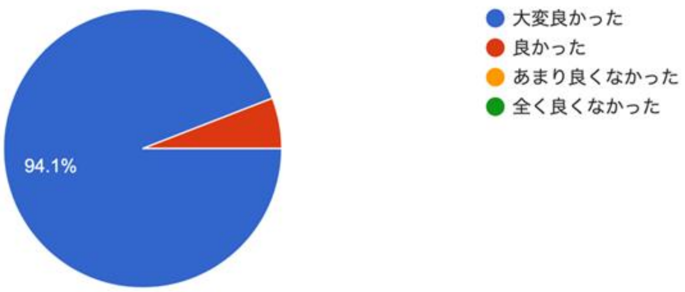
ジェイアーン 国際協働学習研究ワークショップ 第一回事後アンケート結果

令和２年 12 月 16 日

NPO 法人ジェイアーン

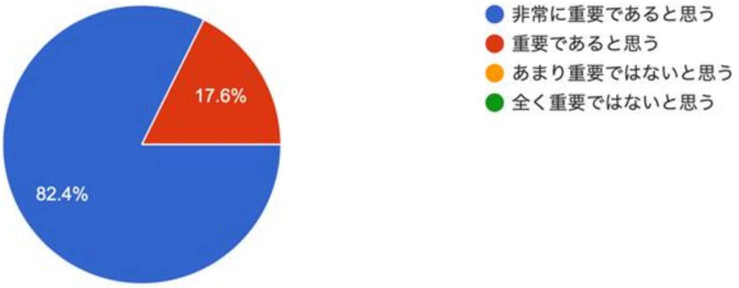
Q１.今日のオンライン研究ワークショップの内容はいかがでしたか。

17 件の回答



・新しい分野で次に活かせそうだから！
・アメリかでどのような教材が使われていて、学年別にどのような内容をカバーしているのかが良く分かりました。
・新しい時代の移行への予感
・今まさに必要と感じているデジタル・シチズンシップについて背景から具体に至るまで学ぶことができました。
・アメリカの実践教材が見れたこととメディア・リテラシーとデジタル・シティズンシップの関係がよくわかりました。とても情報が充実していました。
・メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係が明確になったこと。米国の common media education の教材について、多くの情報が得られたこと。
・タイムスケジュール通りに適切に進行し、議論の時間も確保されていたから。
・アメリカや欧州評議会に対して日本におけるデジタル・シティズンシップ教育の状況がわかった。commonsense.org の教材を一部研究していたので大変参考になった。
・我々が何を意識して DC に取り組まねばならないか？が明確だった。
・背景から実践までわかりやすく網羅して下さり、今後デジタル・シティズンシップを取り入れていく人の立場にたったとても良いワークショップだと感じました。
・学校の教員相手の研修（教育委員会等）だと、現場では無理だ、とか、情報モラルで何がいけないのだ、また○○教育か、などという、ネガティブな意見や質問が多いが、今回はそうしたネガティブな印象は全くなかったから。
・ZOOM の使い方、良いと思った。
・質疑応答が進む中でより具体的な内容へと踏み込んでお話が聞けたと思う
・これまでの情報モラル教育とのちがいや教材の内容など具体的に踏み込んだ内容を知ることができたから
・今度氏、坂本氏のおはなしをじっくり聞くことができた
・デジタル・シティズンシップについての解説や具体的な事例を聞くことができて、現場での活用のヒントとなった。

Q３.日本の教育現場にデジタル・シティズンシップ教育を導入することについて
17 件の回答



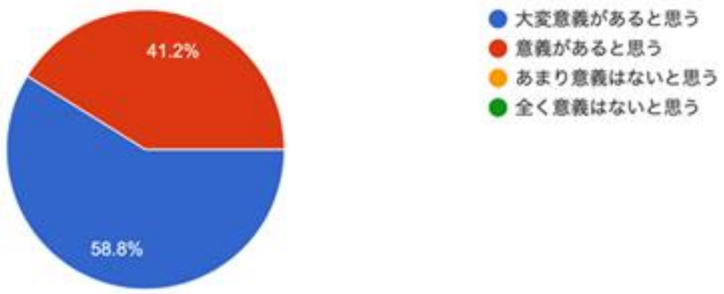
Q４.Q３でそう思う理由やご意見をお聞かせください

・GIGA スクールにおいてもたいせつ
・これから益々ICT の利用が必要となるので、非常に重要だと思います。
・教育へのデジタルな新しいシティズンシップ導入によって、積極的な コミュニケーションが展開され、戦争回避や過去の歴史に見る民族虐殺を繰り返さない可能性
・デジタルがスタンダードな時代に、デジタルをどう使うか　使うことを通してどのような人に育っていくか　それらを学ぶことは必須である。
・日本も、民主主義と人権を守り健全な社会を維持するために善きデジタル市民を育成すること、特に批判的思考を育てるメディア情報リテラシーが重要だと思いました。
・情報モラル教育から脱皮と、シティズンシップ教育の推進が不可欠だと思うので。
・他国に比して、日本は教育の場でのデジタル化が大幅に遅れている。そのため、体系的なカリキュラム設計や指導者の養成、研修の機会も合わせて進めていくことが望まれる。
・デジタル社会で安全、効果的、責任ある生活が送れるように。
・ICT,GIGA スクールによる急激な情報取得方法の変化に、DC 教育の担い手である大人たちがついていけていない。このまま放置することは日本の社会にとっても大きな影響があると感じている。
・私は幼児を対象に研究しているのですが、Common Sense Education に Kider の教材があることに驚きました。日本ではそのまま適用できないとは思いますが、デジタル・シティズンシップの芽を育てること、親にその視点を持ってもらうことが重要だと考えます。
・世界と比較してすでに１５年遅れています。いまや重要かそうでないかを議論している余裕も状況も日本の教育界にはないと思っています。
・技術的な使い方だけでなく、使う上のモラルがより一層大切と思う。
・デジタルに限らず、日本はシチズンシップを育成していかないとまずいと感じることが多いから。
・情報のあつかいの恐ろしさだけでなく、これからの生き方を考えることに直結する学びだと考えたためです。
・日本の教育は、市民（性）を育成することに関して課題があると感じている。現代社会においては社会のデジタル化を視野に入れなくてはならない。よって Q3 のような考え方は重要だと思う。 しかし、〇〇教育を導入することには（〇〇がなんであっても）学校現場は抵抗があると思う。
・GIGA スクールで実現する新たな学びに最適である。
・生徒指導目線ではなく、生徒一人一人が自分ごととして捉える必要性があると考える中で、モラル教育やマナー教育より、デジタル・シティズンシップの考え方が重要であると考えている。

Q5．メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係について、ご意見やご感想をお聞かせください。

・どんどん活用して、交流を行いたい
・とても密接な関係だと思います。メディアを利用する場合、安全性も必要ですが、利用する責任も問われます。市民性を育むには今後、必要です。
・お話が詳しすぎて、正直なところよく分からない。。。。
・正直なところその区別や関係について、いまだ明確にものを言える程理解できていません。しかし、それらを一つ大きなものとしてとらえ、従来の情報モラル教育とは一線を画しながら子どもたちとともに学んでいきたいと考えています。
・時系列で解説していただき、統合の経緯がよくわかりました。
・メディア・リテラシー教育もデジタル・シティズンシップも、日本の公立小中学校の現場では、あまりなじみがないので、今後は、教科教育や道徳・特活等でどのように導入できるか、実践研究が必要だと思います。
・分かりやすい資料提示であり、とてもよかった。
・メディアリテラシーはデジタル市民として生きるために必要。
・DC が育つことで、メディアリテラシーを完全に担保できるのか？の答えを持ちたい。
・これまでの研究者との関係性が難しいので、自身が発言するときに注意しなければならたいと強く思いました。またそのような事情を説明してくださったおかげで地雷を踏まなくてすみそうで感謝いたします。
・デジタル・シティズンシップ力と、メディア・リテラシー力があるとして、デジタル・シティズンシップ力が高い人は、同時にメディア・リテラシー力も高いのでしょうか？デジタル・シティズンシップ力が高くとも、メディア・リテラシー力が低い、という人は存在するのでしょうか？
・カタカナの言葉はあまり好きではないが、定義をはっきりして使えば良いと思う。違う概念で議論しても無意味である。
・図書館や図書教育の進歩も重要であると感じました。
・これからの世の中を生きる上で切っても切れないメディアとの付き合い。一市民として生きていく子どもたちに付けたい力を校内でも話題にしたいと強く感じました。ありがとうございました。
・メディア・リテラシーはデジタルシ・ティズンシップを構成する重要の要素だと思います。
・ICT が当たり前の社会において、メディアリテラシーはもちろん、特にデジタル・シティズンシップの養成は急務であると思う。

Q6.グローバルなオンラインコミュニティを持つシティズンシップ教育の観点から、どう思いますか。
17 件の回答



Q7.Q6でそう思う理由やご意見をお聞かせください。

・交流の中で必要になる
・iEARN は他国との生徒と協働学習をする場であるので、大変意義があると思います。
・オンラインコミュニティへ従来参加が困難であった国々からの参加の可能性
・欧米の研究や実践、情報を取り入れていく必要を強く感じています。アイアーンはその窓口になってくださっていると感じています。
・ICT を効果的に使って、異なる文化や考えを持つ同世代と対話する体験から生きた学びができると思います。
・アイアーンのこれまでの実績を、デジタル・シティズンシップ教育に活かして欲しいと思います。
・コロナ禍において、オンラインコミュニティ、コミュニケーションも必要性が増しており、教育のみならず、仕事、生活課題としても不可欠な問題であるため。
・大いに意義があると思うものの、どのプロジェクトにどのように参加するかによってデジタル・シティズンシップ教育の場として生かしきれない可能性があると思う。
・旗手としての期待
・周知や情報の集約でコミュニティの意義があると思います。
・日本がいかにクローズドな内向きの政策に固執しているかを反省するよい機会になると思うから。
・世界中の国が理解しあうための手段の一つとして良いと思う。
・多様な人が集まり学ぶことができるコミュニティがあることは素敵なことだと思います
・可能な社会は全世界の課題。世界を相手にすることになる子どもたちですから、デジタル・シティズンシップ教育は日本だけで考えることではないと考えます。世界と繋がっていることはとても意義があると思います。
・デジタル・シティズンシップについて、必要性を訴え行動する組織は他にないのではないか。
・日本はデジタル・シティズンシップ教育が遅れていることを痛感しています。是非広めていってほしい。

Q８今後、デジタル・シティズンシップのオンライン研究会で、どんなテーマの講演をききたいですか？

・発達段階における縦の系統性について
・日本で、実際にどんな授業が行われているか事例を聞きたいです。
・具体的な JEARN 会員への学びの内容
・1 人 1 台時代のよき使い手が育っている実践やその背景や価値について学ぶ機会があるとありがたいです。
・日本での授業実践例
・実践研究の成果発表と研究者からのコメント
・まずは本を読ませて頂きます。
・日本の教育現場への具体的な導入の提案
・日本の教育現場の実践はもちろん、米国以外の国の状況も知りたいです。
・これは、私がお聞きしたいです。
・特にありません。
・デジタル・シティズンシップのアウトプット事例をたくさんみたいです
・授業の様子や子どもたちの反応など、具体的な様子が知りたいです。
・具体的な活用例。日本の教育の中で使っていけるような教材等の開発。外国のように、学校図書館での活用。

コメント（自由にお書きください）

・大変学ぶことが多い時間でした。ありがとうございました！
・貴重な学びとなりました。勤務校でも取り入れる必要があると思いました。
・個人的に新しい分野で、講演者の皆さんが使われている言葉の理解が難しかった。
・たいへん充実した研修でした。ありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。
・司会として反省点も多いですが、有難うございました。
・とてもインフォ―マティブなウェビナーでした。ありがとうございました。
・ありがとうございました。
・所用で途中退席いたしまして、大変失礼いたしました。どこかに既に出ていましたらすみません、発表者のスライド等の公開はありますでしょうか？情報量が膨大で、スピード感もあったので、ぜひ振り返りがしたいです。
・貴重な機会をありがとうございました！！皆さんのホスピタリティーあふれる情報提供に感謝します。
・参考になることの多い内容でした。ありがとうございました。
・とても勉強になりました。早速実践してみたいと感じています。また、教科を超えて、学校図書館でどう関われるかと言う点について、個人的には一番興味があります。